

今回は、幕末期の佐賀藩（伊万里地方）において、人々が使用していた貨幣について、山本家日記から検討したい。

一般的に江戸時代は「東の金遣い、西の銀遣い」といわれ、東日本は金、西日本は銀が使用されたほか、小額貨幣として銭があった。しかし 18 世紀の末頃から、幕府は次第に金銀の統一をすすめ、1 分銀、1 朱銀などいわば「銀で作った金貨」を多数発行した。貨幣史の議論には「銀目の空位化」というものがあり、要するに人々が銀を使わなくなった、といわれている。ただし、例えば品物の代金や借金の額を銀で表記（～貫～匁）することは続いたようだが、実際の貨幣の授受については、銀が用いられることは少なかったようである。

それでは、幕末期の伊万里ではどうだったか。山本家日記の作者山本卯之吉の趣味は刀剣や掛軸などの収集だったようで、日記には頻繁に刀剣などの購入、もしくは趣味を同じくする人々との収集物の交換、といった記事がでてくる。安政 2 年に（1855）佐賀城下に出かけた際も、所用を済ませた後伊勢屋町や徳万町の小道具屋に足を運んでいる。表には、そうした刀剣類などの購入や、船賃など日記に出てきた貨幣支払いの記事をまとめた。

安政元年（1854）・2 年の日記を見た限りでは、支払いに使用している貨幣はほとんど金と米札である。米札は正確には「米筭」と呼ばれ、は安永 8 年（1779）に発行が開始された。1 年限りの有期通用、札の額面は 1 升から 1 石まで多様にあった。佐賀藩は当初銀 1 匁あたり米札 2 升と定めたが、増刷が続くと次第に銀高・米札安になり、銀 1 匁あたり米札 1 斗 5 升くらいになった時期もあった。そのため佐賀藩は文政 5 年（1822）、9 年（1826）と米札の切り上げを実施している。文政 9 年の切り上げでは、銀 1 匁あたり米札 2 升 5 合とされたが、その後の実勢価格は不明である。

もちろん、金・米札で値段が書いてあったとしても、実際の授受には別の貨幣を使った、もしくはその場では支払っていない可能性もある。その点今後検討する必要があるが、日記の記事の多くは、基本的に実際に何を支払ったか、を書いていると思われる。

日記に拠る限りでは、伊万里地方では金・米札が多く使われていた、と考えられ、銀はほとんど使われていない。銭も日記にはあまり出てこないが、恐らく刀剣類の代金など、それなりの金額の授受だったためで、細々とした品物の支払いなどには、銭が使われていただろう。現代にたとえれば、1 万円札＝金、千円札＝米札、銭＝100 円玉、といったイメージだろうか（もちろん、金や米札にはさまざまな額面があるが）。

地域の歴史を知るには、そこに住んだ人々の暮らしに目を向ける必要があり、「どんなお金を使っていたのか」は人々の暮らしに密接に関わる問題である。今後もさまざまな史料から、さまざまな地域・時期の貨幣使用について、調べてみたい。

表 安政元年・2年山本家日記に記された貨幣支払い記事

安政元年	4月10日	鐸・目貫購入	金1歩、札1斗
	4月26日	刀鋸細工	米札4升
	5月10日	脇差購入	金2朱、札8升
	5月12日	船賃	札5升
	5月14日	船賃	札8升
	6月5日	樽代	小代80文替、大160文替
	7月8日	大河内物徳利牡丹絵入代	銭1貫文
	7月10日	絵2幅表具	銀20匁
	閏7月9日	大小刀代	金5両1歩
	閏7月27日	鉄砲1挺代	金1両2歩1朱
	閏7月28日	田畑代	正金39両
	11月2日	刀	金3歩1朱
		大小鐸	金1両1歩
	11月8日	三福神画	金2朱
	12月15日	田	金8両余
安政2年	1月24日	田	米20俵
	2月5日	僧本光寺施物(法事)	金2朱
		吉祥寺代(法事)	札1斗5升
		目代教順(法事)	札8升
	3月4日	請酒代不足	金90両、年2両ずつ年賦
	5月10日	脇差・鐸	金1歩2朱
	5月21日	酒	60文
	5月26日	小道具	金2歩2朱
		鐸	正1貫400文
	6月17日	鐸・鍬(代の一部)	米札3升
	6月22日	刀鋸	金2朱
	7月7日	脇差(代の一部)	金3歩
	8月2日	大羽釜	金4両1朱
		神ズシ	金2歩2朱
		絵間板	金1両
	8月6日	フチ頭	金2歩、札6升
	8月22日	短刀其外	金1両、米札5升
		短刀	金2朱
		掛軸	札1斗5升
	8月28日	フチ頭・目貫其外	金1歩2朱、札5升
	10月20日	大小(代の一部)	金3歩
	11月14日	短刀鐸、割筭	金2歩
	11月24日	鐸(代の一部)	金1両2朱
		フチ頭・鐸	金3歩
	12月2日	三徳(代の一部)	金1歩2朱
	12月20日	墓	金3両2歩
	12月25日	植木	札1斗6升
	12月28日	暮祝儀	札1斗ずつ